

カタログ

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2025年3月修了

凌 雯婷

主査 百瀬 俊哉 副査 大日方 欣一 佐藤 慈

研究背景

カタログとは「目録」という意味を持ちます。私は新しい本を手にとると、まず目録に目を通します。それを見ることで、その本がどのような内容を持つかを大まかに把握できるからです。時代の発展とともに、写真はより簡便で身近なものになりました。かつては被写体を正確に選定し、ピントを合わせ、測光し、絞りやシャッタースピードを調整する必要がありましたが、現代では時間や空間の制約を受けることなく、いつでも瞬間を記録することが可能になりました。この変化の中で、私は写真技術そのものの複雑さよりも、写真を通じて表現される感情や身近なものが持つ意味に関心を移していきました。写真は、私がどのように世界を認識しているかを表す「カタログ」のようなものです。カメラを使って、自分の人生で出会う出来事や物事にラベルを貼っていく作業「好き」「嫌い」「悲しい」などのラベルを通じて、身の回りのものとより深くつながることができると思っています。

研究目的

本研究の目的は、知覚をテーマに写真表現を探究することにあります。私たちは新しいものを目にしたとき、無意識にそれを過去の経験や既存の知識と結びつけます。視覚だけでなく、学習や記憶が私たちの知覚に影響を与え、全体を見ることなく欠けた部分を補完するのです。この研究では、写真と写真の間に存在する物事のつながりを見出し、それを写真作品として表現することを目指します。そのつながりは形や大きさといった視覚的要素だけでなく、内面的な共鳴や感覚的な深いつながりを含みます。写真作品を通じて、過去、現在、未来、あるいは無機物と有機物の間に潜む隠れたつながりを表現したいと考えています。また、写真を通じてどのように鑑賞者とコミュニケーションをとるのか、写真家と鑑賞者がどのようにして共通の「小さな世界」を構築するのかを探究しました。

研究概要



成果・まとめ

写真は、視覚的要素、感情的共鳴、個人の知覚が結びついた小さな世界を作り出します。このコミュニケーションは、単なる視覚的表現にとどまらず、鑑賞者の内面的な世界に触れるものです。写真は現実を記録するだけでなく、鑑賞者と作家との深い対話を可能にします。鑑賞者はそれぞれの経験、文化的背景、知識体系に基づいて作品を解釈し、多様な視点をもたらします。これにより、作品そのものが豊かさを増し、鑑賞者が意味の構築に参加することで、新たな解釈やつながりが生まれるのです。このインタラクティブなプロセスは、作品に動的な活力を与え、見るたびに新たな意味を持たせることを可能にします。



指導教員コメント

写真が持つ「記録」としての機能を越え、個人的で深い感情的な体験を媒介するものとして捉え直した点は非常に興味深いと考えています。視覚的な情報を通じて鑑賞者の内面世界に触れ、そこに共鳴を生むことができる写真作品は、単なる記録を超えた芸術的な価値を持っているからです。本作を通じて、観る者は「写真とは何か」という根源的な問いに直面し、鑑賞体験そのものが新たな視点や気づきをもたらすことになるでしょう。

百瀬 俊哉